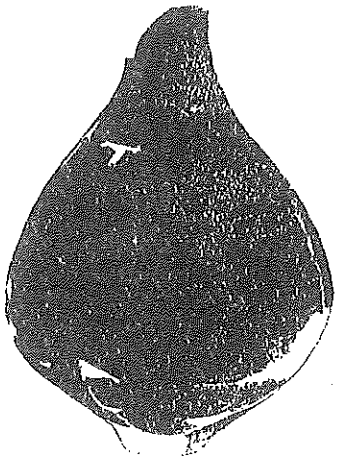
逗子市郷土資料館だより

平成５年９月１日　発行　　ＮＯ．４

今回の郷土資料館だよりＮＯ．４は、弥生時代についてです。逗子市内には、持田遺跡、沼間台遺跡という２つの大きな弥生時代の遺跡があります。特に、持田遺跡では、多くの出土した土器の中に、底に籾の跡のある物もあり、逗子の地で古くから稲作が行われ、多くの人々が生活していたことが知られます。今回は、弥生時代と持田遺跡の出土品を中心に説明しています。

弥生時代は、狩猟・採集を主としていた時代の縄文時代の次の時代で、紀元前３世紀ごろから紀元後３世紀ごろまでの今から約２３００年前の約６００年間続いていたと考えられています。弥生時代の特徴としては、大陸から稲作が伝来し水稲耕作が始まったことです。水稲耕作は、縄文時代の終わりに九州地方に伝来、し西日本から次第に東日本へと伝えられていきました。時代が経るにしたがって、水稲耕作の技術は徐々に進歩していき、生産性が高まり人口の増加が進んでいき、低湿地における農耕村落の増加や、高地性集落の出現、身分の上下の成立など社会の構成において著しい変化が見られていきました。弥生時代には、縄文時代から引き続いて土器や石器が使われていましたが、土器のほかに、宝器・儀式用として銅鐸・銅鏡・銅剣・銅矛・銅戈などの青銅器が使用され、稲作の進歩により鍬・鋤・田下駄・田舟・竪杵等の木製品などが使用されました。

弥生土器の名称は、明治１７年（１８８４）に東京都文京区弥生２丁目から出土した土器が、前代の縄文時代の土器と形式が違うことからこの時代の名前が付けられました。弥生土器は、縄文土器よりも焼成温度が高く、器面は明褐色をし、表面の模様は簡略で沈線・櫛目文・縄文などが施されています。一番の特徴は、貯蔵用の壺形土器、煮炊用の甕形土器、供餐用の高坏・



１．壺形土器

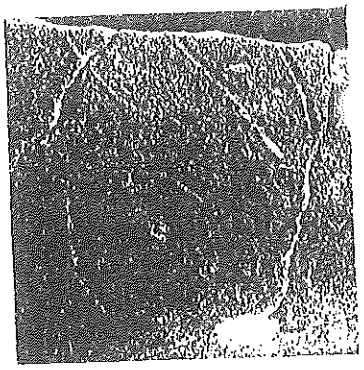
２．甕形土器

３．鉢形土器

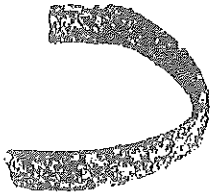
鉢形土器など、用途によって土器の形が区別され使用されるようになってきたことです。

持田遺跡は、逗子市桜山５丁目にあり、昭和４５年（１９７０）から宅地造成が行われる前に発掘調査が行われ、大きな遺跡が埋まっていることがわかりました。この遺跡は、弥生時代の中期頃の約２０００年前の水稲耕作の村の跡から、古墳時代・奈良時代・平安時代までの生活の跡が確認されています。資料館には、持田遺跡の1/333 の模型が展示してあります。逗子の昔の人々の生活を想像して見てください。遺物としては、壺形土器・甕形土器・鉢形土器が展示してあります。写真１は、宮ノ台式の壺形土器で、高さは約４０㎝あります。写真２は、やはり宮ノ台式の甕形土器で高さは約２９㎝あります。この土器の底には、籾の跡が残っており、持田遺跡の人々が米を食していたことがわかります。写真３は鉢形土器で、高さは約１９㎝あります。写真４は久ヶ原式の壺形土器で、高さは約３７㎝です。写真５は、壺形土器の肩の部分に絵とも記号とも見える模様がへらで描かれています。土器のほかには、装身具・石製品などが出土しています。装身具では、写真６の銅釧の断欠があります。釧は腕輪のことで、この遺物は全体の約１／３が残っています。銅釧は、現在の形では楕円形の半分のようにみえますが、ひずんでこのような形になったものと思われます。石製品では砥石が出土しています。

４．壺形土器

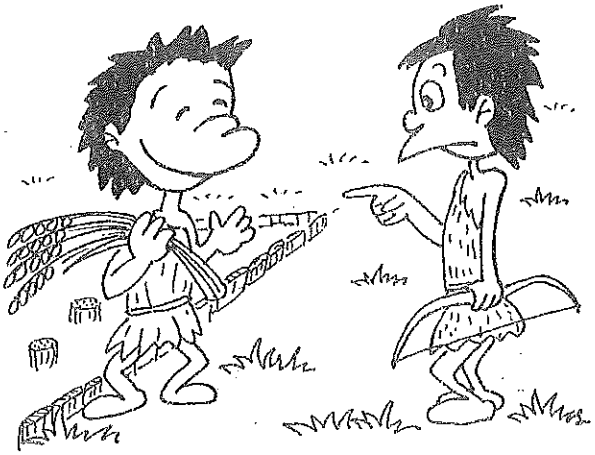


５．土器に描かれた絵？



６．銅釧の断欠

（　文化財専門員　宮　坂　淳　一　）



1993年（平成５年）９月１日　発行
逗子市郷土資料館だより　ＮＯ．４
編集発行者　逗子市郷土資料館
逗子市桜山8丁目2275番
電　　話　0468-73-1741
©　逗子市教育委員会　1993